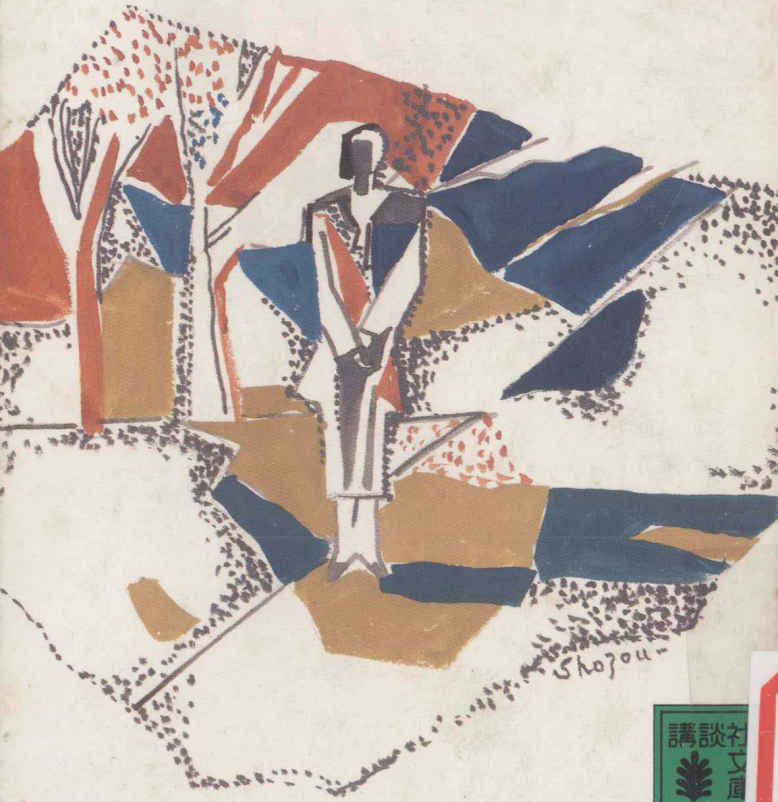
遠ざかる影

夏樹静子



講談社文庫

遠(とお)ざかる影(かげ)
夏樹静子(なつきしずこ)
© Sizuko Natsuki 1983

講談社文庫
定価460円

昭和58年8月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-183085-6 (0)

講談社文庫

遠ざかる影

夏樹静子

講談社

目次

第一章　母の秘密　七
第二章　竜宝商会　四三
第三章　夜半の声　七八
第四章　青木ケ原樹海　一二六
第五章　時効　一六六
第六章　シンセティック　二三一
第七章　ブロンズの疑惑　二九九
第八章　山峡の墓地　三二八
第九章　訣別のとき　三五四
解説　永岡正己　三九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

遠ざかる影

第一章　母の秘密

1

夜十時をすぎると、病院の内部はひっそりとして、物音も聞こえなくなった。
代りにすぐ窓の下にある松林の先から、重い風の音と、唐津湾の潮騒がかすかに伝わってくる。
病室には三台のベッドが入っているが、遼子たち以外の二人の患者は、さっきから気持よさそうな寝息をたてていた。一人は交通事故の若い女性、もう一人は神経痛で長期入院しているという六十すぎの婦人だった。
気温が下ってきたのか、暖房が弱くなったのか、遼子は足許にうすら寒さを覚えた。
膝掛けを取ろうとして遼子が椅子をずらしたわずかな音で、玉枝が目を開けた。熱でどんよりとした眸がゆるく動いて、遼子をさがす。
遼子は顔を寄せた。
「痛かね？」

玉枝は弱々しく瞬(まばた)きしたが、今は痛みに耐えかねるというふうでもない。八時ごろの回診の時注射してもらった鎮痛剤と鎮静剤が、まだ効いているのであろう。

「水ば、くれんね……」

玉枝は訴えた。

「うん……」

遼子は、ベッドの足のほうに吊されている点滴の容器を見あげた。透明なリンゲル液が細いビニール管の中へ規則的にしたたり落ち、玉枝の足首へと伝わっている。たまたまそこだけ無傷だった左足首の静脈を切開した点滴は、二十四時間たえまなく続けられているのだが、それでも玉枝は喉(のど)が乾くらしい。

「先生が、あんまり飲んだらいかんてよ……」

「少しでよか……」

遼子は逆らえず、うすい番茶の入った楽呑(らくの)みを、母親の口許に近づけた。

いつまでも飲み続けようとするのを、無理に引き離す。

「もうちょっと」

「でも、さいぜんからもう随分よ……」

「喉がカラカラで、話ができんけん……」

「無理に話さんちゃよかやんね」

すると玉枝は、焦点のぼやけた眼差で、いっとき遼子の顔を眺めた。その目を天井に移し、ま

た少したってから、何かの思考に惹きつけられているような声で呟いた。

「話しとかにゃいかんこつがあるとばってん」

遼子は思わず胸がこわばった。玉枝が何を話すのかと緊張したのではなく、そんなことを急にいい出した母親の意識が、いよいよあやしくなってきたのではないかと、不安に駆られたからだった。

中谷玉枝が、石油ストーブの事故で下半身に大火傷を負ったのは、一昨日の一月十八日午後七時すぎのことである。玉枝は佐賀県唐津市にあるダンボール製造会社の社員寮で通いの賄婦をしていた。一昨日の夜は、寮の食堂で、ベビーポンプを使って灯油をストーブに移していた時、ストーブの燃料ゲージの目盛りが故障して動かなかったために、一杯になったのがわからず、オーバーフローさせてしまった。火は消してあったが、まだ芯に火気が残っていて、あっという間に溢れ出した灯油に引火し、玉枝の服に燃え移った。早めに帰っていた寮生三人が消火器で消しとめたが、玉枝は両脚から胸の下まで大火傷を負った。

彼女が海岸べりの外科病院へ運びこまれた時、遼子はまだ勤め先の保育園にいたが、報らせを聞いて駆けつけ、そのまま病院に泊りこんでいる。

最初の夜、玉枝は思ったより大事なさそうに見えた。患部には包帯の上に網のシャツみたいなものを着せられ、点滴を受けながら絶対安静で横になっている。が、意識はしっかりしていて、口もきけた。事故の様子を、遼子や会社の人に細かく話すこともできた。

しかし医師は、万一の恐れもあると、そっと遼子に告げていた。見かけは元気そうだが、皮膚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

壊死に及ぶ〝三度〟の火傷部分が全身の三分の一以上認められるので、しだいに皮膚呼吸不全に陥り、患部の蛋白分解による尿毒症の心配もある。意識が朦朧としてくるようなら、気をつけなければいけない……。

昨日から熱が出はじめ、痛みもひどいようだったが、六時間ごとに鎮痛剤を打ってもらって、どうにかもちこたえてきた。

「遼ちゃん。そばに来てんね」

玉枝がさっきよりはっきりした声でいった。

遼子はいわれた通り、椅子を引き寄せた。玉枝は軽く呼吸を整え、ほの暗い天井に視線を据えた。

「遼ちゃん、お父さんのこつ、憶えとるね？」

「そりゃあ、憶えとるよ」

何を今さらと、遼子はちょっと笑った。父の中谷君雄が四十六歳で病死したのは、昭和四十年秋で、遼子が十二歳の時だった。十四年あまり前になるが、もう小学六年生になっていた遼子が憶えていないわけはない。君雄は唐津の青果市場で働いていた。無口で、土いじりや大工仕事の好きな人だった。それほど甘えた思い出はないが、自転車の前にのせてもらって、父の友だちの家などへ連れていかれた記憶が残っている。

玉枝は頷くように瞬きした。

「あんたが、戸籍上では、お父さんの養女になっちょる理由も、話したやろ」

「うん。お父さんが、前の奥さんと生き別れになっていて、その人の籍が抜けるまではお母さんと正式に結婚できんやったというちゃろ？」

戸籍の上では、玉枝は昭和三十年に、遼子を連れ子にして中谷君雄と結婚した形になっている。そのさい、君雄は遼子とも養子縁組したので、遼子は君雄の養女ということになる。

しかし、遼子は物心ついて以来、君雄を実の父と信じていたし、またその通りであって、戸籍面で養女になっているのはちょっとした事情のためだと玉枝に打ちあけられたのは、高校入学の手続きで戸籍謄本が必要になった時だった。

その事情というのは――玉枝は十三歳から満州（現在の中国東北部）で育ち、終戦直前に家族と死別して、昭和二十七年に一人で日本へ引揚げてきた。父親の郷里である佐賀へ帰って間もなく、君雄と知合い、二十八年秋には二人の間に遼子が生まれた。事実上はふつうの結婚生活を営んでいたが、君雄が三十年まで玉枝や遼子を入籍できなかった理由は、君雄は二十一年に一度結婚しており、妻が二十六年暮から行方不明になっていたためである。

配偶者が行方不明のままで三年たてば、残された者は一方的に離婚することができる。が、それまでは婚姻関係が存続しており、再婚できない。君雄は、万一妻が戻ってきても、彼女と離婚して玉枝を迎え入れると約束していたが、結局妻の消息はわからぬまま、三十年には離婚の手続きをすませて、玉枝を入籍した。この時遼子はすでに二歳になり、玉枝の籍に入っていたから、君雄とは戸籍上養女の扱いにするしかなかったというのであった。

遼子は当時その説明を、さほど抵抗なく受け入れた。遼子は母親似で、父の君雄とはあまり似

てないなどといわれた憶えもあったが、ことさら玉枝の話の真偽を疑ってみる気も起きなかった。君雄の死後三年もたっていたからでもあろう……。

玉枝は、少し首をねじって、遼子のほうへ向いた。リヒカの上にかけられた毛布のカバーを、包帯した手で握りしめ、溜めていた息を吐き出すようにしていった。

「あん時の説明は、嘘やったつよ」

「あ？」

「お母さんが上海から白山丸で引揚げてきたつは、二十七年じゃなしして、二十八年春やったとよ。もともと二十七年にゃ、引揚船は動いちょらんだったもん。帰ってきて半年ばっかりで、あんたが生まれた。死んだお父さんとは、二十九年に知合って、三十年に結婚したとよ」

「どういうことね？　……そんなら籍のことは……」

「戸籍のほうが、ほんなこつ通りたい。お母さんは遼ちゃんば連れて、お父さんの籍に入ったつだけん」

遼子は咄嗟に返事ができなかった。それでいて、不思議なほど素早く、母のことばの意味を悟っていた。

玉枝の眸が、熱とは別の潤みをたたえ、しげしげと遼子を見あげた。乾いた唇を動かして、一語一語刻みつけるようにいった。

「あんたは満州でお母さんのお腹に入ったつよ。だけん遼子てつけたとよ。遼ちゃんの本当のお父さんは、別におるとよ」

それから玉枝が打ちあけた話と、すでに遼子がおぼろに聞いていた知識とを合わせると、玉枝の半生がはじめて鮮明な輪郭で浮かびあがってきた——。

玉枝は昭和十六年、十三歳の時、両親に連れられて満州へ渡った。父は鞍山の製鉄所に勤めて、一家は隣町の遼陽に住んでいた。玉枝は一人娘だった。

現地の高等女学校を出たあと、看護婦養成所へ入った。

昭和二十年四月、日本の敗色がしだいに濃くなるころ、十七歳でまだ養成所の生徒だった玉枝は、興城の陸軍病院へ救護看護婦として狩り出された。その直後に、五十すぎの父も徴用された。

二十年七月、遼陽の自宅が爆撃を受け、母の死を伝え聞いた。そして、終戦。父の消息はわからなかった。

興城で玉枝の配属されていた部隊は、八路軍に抑留され、その後八年間、八路軍——終戦後は人民解放軍と共に、安東、瀋陽（奉天）、北京、など主に中国北部を転々とした。

二十七年には南部へ移り、武昌の病院で働くようになった。二十四年の中華人民共和国成立以後三年たち、そのころには、国内もようやく安定していた。終戦当時は捕虜となって悲惨な体験を味わった玉枝も、武昌では大学病院の寮に住んでそこから通勤し、給料を貰う生活に変っていた。休日には町へ遊びに出ることもできた。しかし、引揚船は二十四年以後ストップしていて、日本に帰ることは望めなかった。

そんな時、「龍門寺拓男」と知合った。彼が入院中の友だちをたびたび見舞いにくるうち親しくなったそうで、当時玉枝は二十四歳、龍門寺は三十歳だといっていた。

龍門寺拓男は岐阜県出身で、十七年夏二十歳で召集された。ビルマに送られたが十九年に除隊になり、満州へ渡った。間もなく再召集され、ハイラルで終戦を迎えた。その後は玉枝と同様、解放軍に抑留されて各地を移動したが、二十七年には武昌の自動車工場に雇われていた。彼は日本の軍隊生活で戦車の直し方などを習いおぼえ、自動車整備が非常にうまかったので、解放軍でも重宝がられ、また武昌の工場では、技術者、中国語では「工程師」と呼ばれて大事にされていたようだった。

二十八年に引揚げが再開され、上海から日赤の船が出ると聞いて、玉枝は帰国を思い立った。龍門寺は工場からせめてあと二、三年留ってほしいと懇望されて、居残ることにしていた。玉枝は、龍門寺と一生連れそうほどの決心がつかなかったし、同じ病院で働いていた看護婦たちもほとんど帰るという。今度船に乗らなければもう生涯祖国の土を踏めないような気がした。父が生きて帰っているかもしれないという期待もあった。

二十八年四月に帰国すると、玉枝は両親の故郷であり、自分も十三歳まで育った佐賀を訪ねた。が、父は消息不明のままで、両親の兄弟たちもバラバラになっていて、頼れる人もいなかった。妊娠に気がついたのは、そんな矢先である。龍門寺の子にちがいないのだ。すでに四ヵ月の終りで、堕すこともできなかった。中国に残った龍門寺と連絡のとれるような状況でもなかった。

玉枝は遠縁の農家に一時身を寄せて、遼子を産むと、身体の回復を待って福岡へ出て、職を求めた。

福岡では、機械部品を造る工場の社員寮の賄婦となり、遼子を連れて住込んだ。玉枝は中国ではずっと看護婦の仕事をしていたが、養成所を卒業する前から徴用されてしまったため、正式の免状を持っていなかった。

社員寮で、中谷君雄と知合った。

当時三十五歳の君雄が、終戦直後に一度結婚経験を持っていたのは事実である。が、二年後には離婚している。玉枝が働いていたのは独身寮だったが、そんなわけで君雄はほかの寮生たちよりひとまわりも年上で、いつもみんなから少し離れて、孤独そうに見えた。大勢の食事の仕度で玉枝が忙しい時に遼子がぐずったりすると、君雄が抱いて外へ連れ出してくれた。

三十年秋にその会社が潰れ、君雄が出身地の唐津へ帰るのを機に、君雄と玉枝は結婚した。玉枝は二十七歳、遼子は満二つになったばかりだった。

玉枝は引揚げ後も生活に追われ続け、遼子を産んで一年たたぬうちに中谷と知合ったために、龍門寺を思い出すことは少なかった。いや、思い出したところで二度と会えぬ人と、あきらめていたのかもしれない。

結婚する時、二人は、遼子には君雄が実の父だとして通すという約束をした。遼子が成長して、籍のことで疑問を抱いた場合の言訳けは、君雄が考えてくれた。

君雄はその約束を、死ぬまで守った……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor